

神々の移住地豊の国 (続二)

会員 昴 崇



夕日が背後から黄金色に輝く瞬間

四節 国東半島の環状列石

一九九五年は、年明けに神戸で大地震が発生し、三月には東京の地下鉄で猛毒神経ガス「サリン」を使ったテロ事件が起こり、災害対策、テロ対策にと、その年は日本列島にとって苦難の連続となった。

そんな出来事の中でも、カルト宗教による狂気の事件の数々は、自分の研究にも少なからず影響を与えた。それ以降は、日本国内各地を訪れてみても、どうも住民の反応が悪く、警察官による尾行、職務質問、荷物検査など、不快な出来事が続くのである。

宇宙人だとか、珍獣だとか、楽しい生き物として扱われることは、笑いのネタになるので良い事だ。しかし、日本列島の津々浦々では、旅人を“オウム真理教の信者”とし

て扱う人が多かった。

自分の研究内容は、分類するならば、神道の部類に属するのだが、真実を追究しない人には、そんな説明をしても何の効果も無い。

「地下鉄サリン事件」以降も、自称“ニューヨーク国連本部最高顧問”によるミイラ事件や、岐阜や福井での“白装束集団公道占拠事件”など、カルト宗教による奇怪な事件は度々起こった。

カルト思想が発生する原因には、幾つかの心理的要素があると思う。

その一つは明白ながら、“劣等感の裏返し”という心理。

もう一つ考えるところならば、それは島国根性ではないか。

島国根性とは、言わば“地元の事しか知ろうとしない発想”であり、病的な者の中には、“地元を宇宙の中心として考える発想”を持つ者ま

でいる。皮肉にも、巨石文化の聖地、飛騨一ノ宮「位山」は、それを信仰する人々によって、カルト思想発祥の地にもされてしまった。

「全宇宙を支配する超古代の(宇

宙船を乗り回す)天皇」だとか、「大
麻道」などという、極めて次元の低
いカルト思想は、聖地を大いに汚し
た。

そんな暗い世相に反して、自分の
研究は順調で、一九九五年三月後半
からの九州旅行では、次元を昇華さ
せるような画期的な発見があった。

それ以前の研究旅行では、信州、
奥州、北海道など、東日本の縄文期
環状列石を見聞することが主な目的
で、それらは研究生活初期の基礎的
な学習だったのだが、その年から新
たな発見が続いたことによって、研
究が転換と発展を繰り返したのであ
る。

九州初上陸、研究生活数年目にし
ての、ルネッサンスだった。

■ 豊後真玉 妙見神社環状 列石

環状列石遺構が御神体になって
いる神社など、わずかな数しか日本
列島には存在していないはずであ
る。

それを初めて目にした場所は、大
分県の国東半島であった。

初めて九州を訪れた日の翌日、バ
スを乗り継いで、国東半島の真玉(ま
たま)町という土地の猪群山(いの
むれやま)に登った。

巨石遺構の山として知られる猪
群山は、御神体山としては珍しく、
その形は台形であった。

ルネッサンスは、猪群山を下山し
た後の夕暮れ時に訪れた。

猪群山から海への数キロメート
ルの道のりは、農地と民家との調和
が取れて、のどかで穏やかな風景が
続いていた。

噂では、その道のりの右手に連な
る丘陵地の中に、環状列石遺構を御
神体とする神社があるという。

環状列石は、それまで東日本で幾
つも見てきたものの、それが神社の
境内に存在していた例は一度も見て
いなかった。

縄文時代の遺跡が、神社の境内か
ら発見された例は極めて少ない。

しかも、その環状列石の築造場所
は丘陵上であるので、遺跡の立地条
件からの観点では、北海道の環状列

石と似ている。

少しばかり、その丘陵地を眺めて
いると、尾根筋の樹々の上から神社
の社殿らしき小さな建物が見えたの
で、その方向へ歩いていった。

すると、そこには坂の斜面に、「環
状列石」と書かれた小さな立て札が
立っていた。それが神社への参道の
ようだった。

参道は細くて蜘蛛の巣が多く、あ
まり人が来ない神社のように感じら
れた。

地図上では、その辺りは、真玉町
域大字白野(うすの)の時安(とき
やす)という土地で、その丘陵地の
最高地点は標高八十五メートルと記
してある。

その神社は、丘陵地帯の最高地点
から少し下った尾根筋に鎮座してい
たので、標高は七十メートルくらい
であろうか。

神社に辿りつくくと、拝殿手前の地
面に、割れて朽ち果てた木製の立て
札が落ちていて、それには「妙見神
社 祭神 天御中主神」と、白地に
黒のペンキで記してあった。

拝殿の奥には小さな本殿があり、

その後ろには幾つもの巨石が見える。
その整然とした並び方は、古代人
によって意図的に構築されたと考え
るに充分だった。

初めて、九州で環状列石遺構を見
た瞬間だった。
その時、夕陽が海に沈もうとして
いた。

この場所は、海から一キロメート
ルほどしか離れていない。

角度を変えて環状列石を眺めて
みると、その中央の大きな石組の後
ろに、日没時刻の太陽が隠れる事が
判った。

その様子は、まるで仏像の背後か
ら放射される後光の様でもあった。
人の心に情熱の火を灯す、華麗な
る太陽の踊り、サン・ダンス。

しばらくの時間は、法悦のような
気分浸って、その場所に佇んだ。

新しい発見は、自分の研究に革命
をもたらした。

まず考えた事は、発掘調査されて
いない遺構の年代を分析する方法で
ある。

大分県に環状列石が存在してい

るという事実は、少し意外だった。

だが、北海道と大分県の環状列石が、お互い似たような立地条件を持つているという事実は、謎の解明への大いなる鍵だった。

この事実を考える時、心の中に思い浮かぶ映像がある。

一つの水滴が水面に向かって落ちていく。それは水面に波を起し、その一点から波紋は四方八方に広がり、やがては波自体が小さくなって消え、水面は元の静寂に戻る。

遠く離れた二つの場所で、似たような遺構が存在する場合、どこかに必ず原点が存在している筈なのである。

それは波紋が一点から同心円状に広がっていく様子にも似て、長い年月を経て遠い場所にまで、過去の文化が伝わったのである。

妙見神社の環状列石は、調和と不調和が表裏一体となった、古代の前衛芸術の逸品であった。

その有り様は、それまでの様式を継承しているようでもあり、その反面、様式を大きく崩しているように

もある。

絵画でも、彫刻でも、音楽でも、長い年月に渡って一つの様式が受け継がれると、それを打ち壊すような芸術家と作品が現れる。

妙見神社の環状列石を見ていると、美しいクラシックと激しいハードロックの音色を同時に聴いているような、ある種の不思議な感覚に襲われる。

その円環の形は、環状列石の内側に入って見渡してみれば、正しく円形を描いているように見えた。

けれども、環状列石の外側を一周してみると、その円環の形は片側半分が歪んでいて、釣り合いが取れていないのである。

これは古代人が仕掛けたトリックなのである。

だまし絵を立体的に表現したなら、こんな遺構が出来上がるのだろうか。

違和感の理由は、円環を構成する石の大きさが、場所によって大きく異なるためである。

社殿に近い側の幾つかの石は、かなりの重量を持った巨石である。



妙見ストーンサークル

それらの石は、大人が数人で引つ張れば、運搬可能なのではないか。こちら側から見た景観は、これま

それらの巨石は、人の手によって運搬が可能なのかどうかも定かでない。

これほど大きな巨石を使った環状列石は、これまでに見たことが無い。

一方、社殿から遠い側の円環は、高さも幅も同じような規模の石が、ほぼ等間隔に並んでいて、実に整然としている。

で見えてきた環状列石遺構の中でも、最高に美しかった。

まさしく様式美の頂点である。

しかし、こちら側からの角度では、幾つかの大きな巨石が見えにくくなるから奇妙である。

違和感を受けた理由は、もう一つ有りそうだ。

よく見れば、円環の内側で一メートルほどの段差があり、円環の半分を構成する巨石が一段低く配置されていたのである。

丘陵の尾根筋なので、斜面という立地条件も重なって、社殿に近い側の巨石が見えにくくなる角度があったのだ。

この妙見神社環状列石は、どれだけ眺めていても巨石愛好家の目を飽きさせないような、珍味のような味わい深さがある。

その円環の内側は、地面が少しばかり盛り上がっている。

“環状列石内側の塚”などという構造は、その時初めて目にした。

その塚の上に組み上げられた巨石の石組も、初めて見る構造だった。

使われている巨石の大きさ、片側半分が歪んだ円環、初めて目撃する構造ばかりで驚いた。



中央石組みを北から見る

この場所に再び来て、さらに深く考察してみようと思った。

とは言え、日本各地の環状列石は、それぞれ構造が全て異なっているの
で、それを研究する作業は、難しく
も楽しい。

自分の足と目で見聞を積むこと
の深い意義。
自ら見聞を積まない者は、いつま
でも進歩がない。

“環状列石は東日本にだけ分布する”などという定説は、暗い病床で寝込んだ鬱病患者の屁理屈でしか
なくなつた。

その瞬間、縄文学と巨石文化研究
は、新しい次元へと飛翔した。

翌、一九九六年十月、再び「妙見
神社環状列石」を訪れた。

その秋の研究旅行では、この環状
列石遺構の大きさを測って図面に記
録しようと考えていた。

その数日前には、速見地方内陸部
「下山環状列石」との劇的な出会い
があり、いよいよ巨石文化の研究は
大きな舞台に立ったという感じだっ
た。

中秋の心地好い陽射しを浴びな
がら眺めていると、妙見神社の環状
列石は、美しさと力強さが共に際立
つて見え、古代遺跡としての価値が
非常に高いことを再認識した。

「下山環状列石」は、遺構の三割
くらいが破壊されてしまったものの、
この環状列石の保存状態は良好で、
おおむね築造当時の姿が残されてい
るのではないかと感じた。

これは国の指定史跡としての価
値は充分にあり、小さな町の文化遺
産としての位置は相応しくない。

図面の作成と撮影の前に、半日費
やして草を刈つた。

撮影に際して工夫したことは、環
状列石の中心部から東西南北の方向
に白い糸を張ってみたことである。

この環状列石は円環の中で大き
な段差があり、中央部で数個の巨石
を組んであるので、高い所と低い所
で大きな差がある。

しかも、見る角度によって遺構の
様相が大きく異なるという特徴もあ
る。

このような、立体的で高低差が大
きい巨石遺構は、図面に記録するこ
とが困難であろう。

そのため、中心から東西南北に糸
を張つた環状列石を、多様な角度か
ら撮影すれば、そのまま写真が立体
的な図面になるうかとも考えたので
ある。

出来上がった図面は、環状列石を
真上から見たと想定した場合の一枚
だけだったが、自分にとっては良い

経験だった。

図面を作成するための第一段階
では、円環の大きさを測ってみた。

妙見環状列石は、円環の内側が正
円形を描いているので、正確な数値
ではないけれども、おおむね直径約
九メートルという値が出た。

円環の中心に当る位置は、巨石を
組んだ石組の頂点だったので、円環
を形成する石とは高低差があり、直
径を測ることさえ難しい。

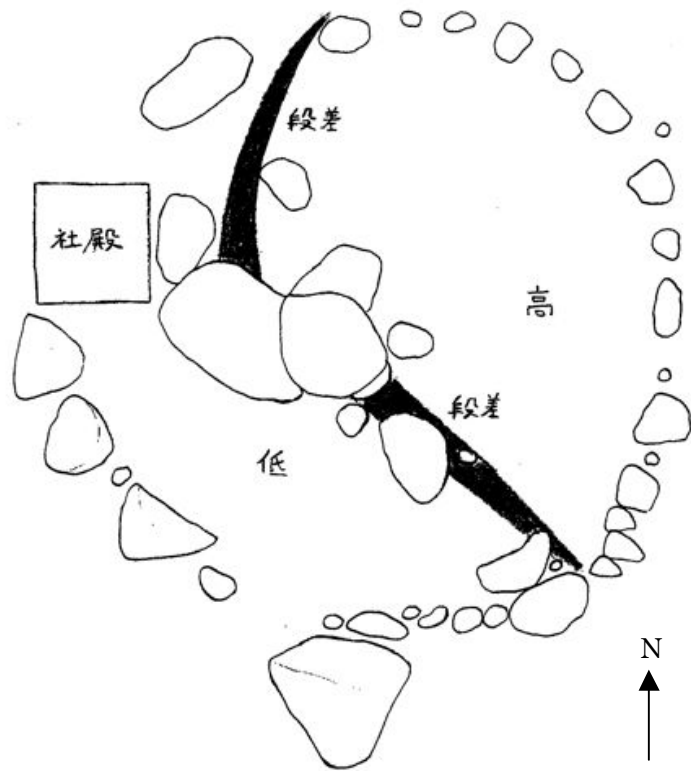
図面作成の第二段階では、個々の
石の大きさを一つずつ測り、石の総
数を数えてみた。

個々の石の大きさは、場所によつ
て大きく異なっている。

円環の東側と西側での、非対称の
妙。

円環の東側半分は、おおむね高さ
も幅も六十センチ前後の石が、ほぼ
等間隔に整然と並んでいる。

それでも部分的に見ていくと、や
や大きな石もあり、漬物石大の石も
あり、柱状の石が横たわっていたり
もした。



東側半分の石の総数は二十五個くらいだった。

一方、円環の西側半分は、やや小さい石が見られるものの、多様な形の重たい巨石が少数配置されていた。その中でも特に、中心から南に配置されている巨石は、長さも幅も二メートルを越えており、かなりの重

量を持っているように見える。

これほどの巨石を、ここまで本当に運んだのだろうかという疑問も感じた。

また、社殿裏側の巨石は、建物を造った時に、円環の内部に移動させたのではないだろうか。

もし、これが円環の上に配置されていたならば、ほぼ全体に渡って正



円環の西南部分の巨石列

円形が完成するのである。中心から西南西に位置する二つの巨石は、自然に割れたのか、故意に割られたのか、本来は一つの巨石であったようだ。

一応ここでは、西側半分は、六個の巨石で円環を形成しており、やや小さい石まで含めて、石の総数は九個だと言っておこう。

中央部の石組でも、大きな巨石が用いられている。

最も高い位置に組み上げられている巨石は、その底が地面に接して



円環の西北部分の巨石列

おらず、三つの巨石によって支えられていた。

この石組は、見る角度によって大きく様相が異なっているのだが、日没時刻の太陽が背後に隠れる位置から眺めると、石組の姿が最も美しく見えた。

下を支える三つの巨石の中でも、中心から西に配置されている大きな巨石は、この環状列石の中でも一番か二番の重量を持っているのだろう。その高さは二メートルほど、幅も二メートルを越えている。



猪群山方向に並ぶ三つの石

中央部の石組と、それに隣接する石の総数は、合計十個だとしておこう。

円環の東西と中央部の石組、三つの部分を合計すると、環状列石全体の石の総数は四十四個くらいだった。

図面作成の第三段階では、中央の石組の上に立って、個々の石の形を見ながら、図面上の円の外側に沿って石の形を描いてみた。

測量機器などを使わずに個人で行なう図面製作は、これぐらいが限度だった。

この環状列石は、実に立体的で表情豊かなので、最新機器を使つての

測量が望まれる。

巨石の大き

さ、非対称の美

石組の背後から

輝く夕陽。

これを設計

した古代人は、

優れた芸術家であ

らう。

築造当時の

姿を残している点など

も含め、その存在価値は世界に誇つ

て良い。

これを今日まで守り続けた真玉

の人々は、その苦勞を賞賛されるべ

きだろう。

■ 妙見神社環状列石の六要素

では、ここから「環状列石の六要素」について考察し、「妙見神社環状列石」の造られた年代について推測してみよう。

しかも、ここでは特に、大分県内の環状列石が、どのような順序で築造されたかを明らかにしていきたい。

まず一つ目の要素は、円環の形である。

「妙見神社環状列石」の円環は、その内側が正円形でありながらも、片側半分は外側方向に歪んでいるので、完全な正円形ではない。

これは環状列石の原点から一歩踏み出した形だと言えようか。

円環の形は北極星信仰と関係しているもので、これは過去の信仰の記憶を残した形なのだろう。

この点だけを見るならば、この遺構は「下山環状列石」よりも古い時代の構造を持っていることになる。

二つ目の要素は、個々の石の大きさ、石の総数である。

長い年月の流れによって、環状列石の個々の石は大きくなる傾向があり、石の総数は減っていく傾向がある。

「妙見」では、環状列石としては最大級の巨石が配置されている。

石の総数は四十四個くらいなので、最少とは言えないものの、とても少ない部類に入る。

そうなると「妙見」は、環状列石

の原点（縄文前期信州）から、遙かな年月が経過した時点で造られたということになりそうだ。

この点においては、「妙見」は「下山」よりも後の時代に造られた遺構だということになる。

三つ目の要素は、石の組み方、並び方、石の形である。

「妙見」では、中央の石組から南南東の方角に向けて、やや大きな石が三つ配置されている。

その先や左寄りには、台形の神体山、猪群山が見えるので、これは何らかの意味を持った配置なのだと考えて良さそうだ。

山に向かって連なる石ならば、縄文前期の信州「阿久遺跡」を思い出す。

このような構造は、環状列石が発

生した当初から存在していた。

「下山」では、このような構造は見られないが、神体山を意識している点においては、似た構造を持っていると言えよう。

環状列石と神体山は密接な関係を持っている。

ただ「妙見」では、「下山」のように、動物に似た形の石は配置されていない。

この観点から考えると、「妙見」と「下山」との間に深い関係は感じられない。

二つの遺構の築造年代は、少し隔たりがあるのではないか。

四つ目の要素は、築造場所である。環状列石遺構の多くは、山を意識した場所に造られている。

その築造場所は、おおむね古い時代から順に、四つの段階を辿っている。

その第一段階（縄文前期から中期、信州周辺地域）は、標高の高い山が見渡せる場所。

第二段階（縄文後期、奥州北部や北海道西部）は、秀麗な形の低山の近く。

第三段階（縄文後期以降、北海道西部から中部にかけて）は、標高差百メートル前後の山や丘陵の頂上付近。

第四段階（縄文晩期末から弥生時代、大分県）は、標高差数百メートル

ルの山の頂上付近。

このように考えていくと、縄文前期の信州から、巨石文化が遠い地域にまで伝わっていく過程で、築造場所も少しずつ変化していることが判る。

それはまるで、水滴の落ちた水面の一点から、同心円状に広がっていく波紋の様でもある。

そして、水面の波紋が小さくなって、やがて再び静寂が戻る様に、環状列石という巨石文化にも、いつかは終わりが訪れる。

この分類に従えば、「下山」の築造場所は第二段階に属し、「妙見」の築造場所は第三段階に属す。

第二から第三の段階にかけて、確実に変化した点を考えるならば、それは環状列石と集落との距離ではないかと思う。

第一から第二にかけての段階では、環状列石が周囲を住居に囲まれている例などもあり、村と巨石遺構との距離は短いのである。

しかし第三段階では、巨石遺構は村から離れた位置に造られた。この観点からの推測では、「妙見」

よりも「下山」の方が、より古い時代に造られたと言えようか。

さて、ここで気になることは、この環状列石が神社の境内に存在していることである。

このような立地条件を持つ環状列石は、極めて珍しい。その構造の特異性まで含めて、あまりにも個性が強い。

ここでは、同じような立地条件であっても、北海道の環状列石と区別する意味で、“第三段階+α”と表現しよう。

それでは何故、「妙見環状列石」は、後の時代において神社の境域になってしまったのだろうか。

その最大の理由は、北海道を含めた東日本の環状列石とは、遺構の築造年代が異なるからだ。

造られた時代が異なれば、その時代の信仰も異なる。

「妙見環状列石」が造られた年代は、現代に続く神道が発生した時代だったのかもしれない。

神道の専門用語には、「磐境（いわさか）」という言葉があるけれども、これは古代の言葉なので、どんな遺

跡が「磐境」であるのかさえ、今となっては定かでない。

だが「磐境」とは、“岩石によって境界や聖域を築いた遺構”を示した言葉である筈だ。

もしかしたら、それは環状列石を示した言葉なのかもしれない。

しかも、それは縄文期東日本の環状列石ではなく、弥生時代以降に造られた環状列石を示した言葉ではないか。

個人的には、この記念すべき「妙見神社環状列石」を、「磐境第一号」と呼んでみたい。

なお、第四段階に属する巨石遺構が、国東半島や宇佐地方には幾つか存在している。

猪群山の大規模な巨石群、宇佐の米神山巨石群、国東半島国見の環状列石などは、第四段階の立地条件に属している。

第四段階に属する巨石遺構は、後の時代に神社の元宮や奥宮になる場合もあり、地域神話の伝承地になる場合もある。

築造された時代が異なれば、築造場所も異なり、信仰の形も異なる。

日本列島の神話伝承に語られている時代の到来。

「妙見環状列石」が造られた時代は、第三段階の最後頃ではないか。

そして、その後間もなく第四段階の時代が訪れ、環状列石の築造場所は、より高い山の上へと変化したのだろう。

五番目の要素は、使用目的である。「妙見」では、中央の石組から猪群山の方に向けて、やや大きい石が三つ並んでいる。

これは明らかに、猪群山を神体山として考えた構造であり、亡き者の魂を送るための儀式「イ・オマンテ」を行っていたことの痕跡だ。

その猪群山の頂には、大きな立石が斜めに傾いて立っている。

その大きな立石は、正確に北極星を指し示してはいないが、これは古人にとって、魂を天上界へ送るための設備だったのだろう。

この場合、猪群山は魂が鎮まる所ではなく、天上界への中継地点なのである。

環状列石から神体山へ、そして天

上界へ。

古人の他界観について、このような発想を持つても良いと思う。

六番目の要素、それ以前の環状列石が持っていない、新しい構造について。

「妙見」には、この環状列石で見られない構造がある。

それは円環の中央部から、二つの方向に延びる段差である。

その段差は、中央石組から南南東にかけての地面と、中央石組の西寄りの地点から円環の最北部分にかけて続いている。

段差の高低差は最大一メートルくらいで、それは円環の外に近づくに連れて小さくなり、円環の外では消えている。

そのため、円環の西半分は東半分よりも地面が低い。

また、円環の西半分を形成する巨石の重さから考えると、これらの巨石は運ばれて来たのではなく、地面を掘り下げることによって巨石を露出させたと考えた方が良いと思う。

そして、掘り出されて余った土は、

円環の東半分を盛り上げていったのではないか。

円環の東半分は、地面が盛り上がっているの、円形の古墳の様でもある。

“円環内側の塚”という構造は、大分県内の幾つかの環状列石で見られる。

それは、豊後大飼「神宿環状列石」で、小さな岡の頂上部を囲む構造として初めて創り出されたようだ。

それ以後、その構造は「下山環状列石」に近い「須久菩塚（すくぼづか）」に継承されたのだろう。

「妙見」の塚は、岡の頂上部を囲んだ構造とは言えないものの、それと何らかの関連性を持った構造なのではないか。

なお、「妙見」の塚の表面を観察してみると、所々に漬物石大の石が集まっている部分がある。

築造当時の「妙見」は、塚の表面が古墳の葺き石の様に覆われていたのかもしれないし、あるいは、塚の地下部分が積石構造になっているのかもしれない。

円環内側の塚は、埋葬施設の可能

性もある。

「須久菩塚」と「妙見」には、もう一つ共通点があるような気がする。

「須久菩塚」では、円環内部の塚の上に自然石が積まれていたという。その構造は、「妙見」における中央部の石組と、何らかの関連があるようにも感じられる。

きつと、妙見神社の環状列石は、「須久菩塚」と近い年代に造られたのだろう。

「須久菩塚」では、弥生土器が表面採取されているというから、「妙見」でも弥生土器が出土する可能性がある。

だが「須久菩塚」は、築造年代の関係からか、その後は神社の境域に成らなかつたようだ。

このような場合、巨石遺構は破壊される運命にある。

もう少し築造年代が後であったのなら、「須久菩塚」は神社の境域に成つたのかもしれない。

互いの築造年代を比較すると、やや「妙見」の方が後なのではないか。

大分県内の環状列石を、築造年代

の古い順に並べてみるならば、おそらく以下のような順序になるのだろう。

「下山」、「神宿」、「須久菩薩」、「妙見」、そして「鬼籠」。

■ 豊後国見 鬼籠環状列石

二〇〇二年新春早々、自宅に一本の電話がかかってきた。

その方、中根洋治さんは、愛知県岡崎市に住んでいると言いつ、国内各地を訪れて、巨石遺構やイワクラの研究を何年も続けているらしい。

岡崎は、筆者の地元の豊田市と境界線が接している都市なので、こんな近い土地に巨石研究者がいたのかという驚きを感じ、行動範囲の広さに感心した。

中根さんが僕について知った場所は、大分県の別府。

紹介者は、「下山」の地主、井上香都羅さんだという。

井上さんには幾度も御世話になっているので、頭が上がらない。

だが世の中には、不思議な巡り合わせが起きてしまう事がある。

何と、中根さんは僕の父親をよく知った人だった。

それが判明した訳は、電話で話しているうちに、話題が職業に移ったからだ。

会話中、中根さんは何かの予感があったのか、僕の父親の職業について質問してきたのだった。

僕の父親と中根さんとは、愛知県土木事務所での仕事仲間だったのである。

その時の会話は、何度思い返してみても、偶然の一致の醍醐味だ。

研究旅行の旅先や、それに係する御縁について、これまで幾度も不思議な出来事があった。

しかし、そのような現象が起こる理由については未解明だ。

ちなみに、巨石研究の世界とは、古典、歴史学、天文学、地質学、登山、等々、多様な分野の人の集まりだという印象を受けるが、土木建築分野の人の割合は比較的大きいような気がする。

巨石遺構の築造とは、古代の土木

建築事業なのだから、それは必然か。

後日、中根さんは我が家へ来訪した。

その手には、これから出版する予定だという作品の資料や、焼き芋なども持っていたので、楽しくて活気がある人だと思った。

中根さんが企画している作品のタイトルは、「愛知発 巨石信仰」。

愛知県内の巨石遺構やイワクラを中心に、日本列島の広い範囲にまで取材をして、図鑑のような形で製作中だという。

一足先に、その目次だけを見せてもらったけれども、取り扱っている巨石の種類だけでも驚いた。

磐座、環状列石、岩壁、岩神、岩屋、雨乞い石、船石、腰掛石、物見岩、金勢様、鏡岩、その他の磐。

これだけの巨石を、愛知県内と県外に分けて、写真や地図、図面まで付けて編集しているというのだから、井上さんと同じく、まさにトップアマチュアだ。

地元の事ばかり調べている島国根性の研究者は数多いものの、この

二人は低次元の発想とは縁が無いようだ。

御二人を覗いていると、長い道のりを地道に根気よく歩いて行く亀の様で、何かの共通性を感じてしまう。

きっと、井上さんも中根さんも、目立たない所で功徳を積み上げて、自らを進歩させていく人なのだろう。

「愛知発 巨石信仰」は、その年の八月に発行された。

ただ、公務員は個人の名前で出版が出来ない規定になっているらしいので、その著者名は「愛知磐座研究会」になって、連名での発表になった。

これによって、僕自身も「愛知磐座研究会」の一員になって、その巻末に名前を載せていただいた。

「愛知発 巨石信仰」は力作、力作で、作品としての寿命は長そうである。

何よりも、考古学会の悪い常識に汚染されずに、現地に確認取材している点が素晴らしい。

当然ながら、この本には「下山」や「妙見」、宇佐地方の巨石なども載

つていて、新しい巨石研究の方法が示されている。

これこそアマチュアの真骨頂だ。以後、中根さんは愛知県土木を定年退職して、新たな研究分野を開拓し続けている。

その第一弾は、愛知県内の巨木についての研究。

二〇〇五年三月二十五日、愛知県の長久手と瀬戸で開かれた「愛・地球博」の開幕日に併せ、「愛知の巨木」(風媒社)が出版された。

これも現地取材して図鑑形式でまとめて世に出され、予想以上に受け容れられたのか、新聞の広告で何度も目にした。

その次に予定している作品のタイトルは、「忘れられた街道」だとか。

さて、「愛知発 巨石信仰」での数あるレポートの中で、国東半島の巨大な環状列石に関する報告は興味深い。

その環状列石は、国東半島の北端、国見町の鬼籠(きこ)という土地にある。

鬼籠の南方には、標高四三六メー

トルの鷲巢岳という山があり、巨大な環状列石は、その頂上から北へ一キロメートル強の地点に存在するようだ。

その地点は、おそらく標高三六〇メートルくらいなのではないか。

そこは緩やかな谷になっていて、環状列石は谷を挟むように不規則な楕円形を形成している。

その谷は南北にかけて連なり、やや東側が高い。

この環状列石は、地形に合わせて築造されたのか、立体的で高低差がある。

列石の最高地点は、その最南部であり、その最北部とは約三十四メートルの標高差があるという。

この環状列石の長径は約百二十メートル、短径は約四十五メートル。

〔国見町史〕によれば、その長径は一二五メートル)

間違いなく、日本列島最大級の環状列石遺構である。

この鷲巢岳の地質は、凝灰岩でありながらも、列石を形成する石は安山岩だというから、人工的に築造された事は確実だ。

もはや、「九州に環状列石無し」などという常識は通用せず、それは逆に、空想の類だと言わなければならない。

そして奇跡的な事ながら、この環状列石は部分的に発掘調査を受けていた。

それは、列石東北部の立石遺構と、その付近の谷底の二箇所だという。

そこからは、須恵器片が二つ見つかったようだ。

ここで古墳時代に祭祀が行なわれていた事は確かだろう。

発掘調査後、「鬼籠環状列石」は大分県の史跡に指定された。

この遺構全体の発掘調査が望まれる。

「大分県指定史跡 竹田津元宮遺跡 附鬼籠列石」

これは遺跡の正式名称である。

実は、「鬼籠環状列石」は一つで県史跡に指定されたのではなく、もう一つの遺跡と一組で指定されている。

それは、「鬼籠列石」から北北西方向へ数百メートルの地点に存在する巨石の集まり、イワクラである。

その地点も、標高三百メートル以上に位置するようで、人里から離れている。

そのイワクラには、竹田津港近くの「武多都神社」の旧社地だという伝承があるため、遺跡の名称は「竹田津元宮遺跡」となっている。

この遺跡には、南北に百メートルくらい離れた、AとBの二つの地点がある。

発掘調査の結果、二つの地点からは共に、土師器(はじき)片が出土したようだ。

土師器は、弥生時代から古墳時代に渡って作られているらしいので、このイワクラへの祭祀は、弥生時代にも行なわれていた可能性があると思う。

なお、「武多都神社」と「竹田津元宮遺跡」、「鬼籠列石」、鷲巢岳頂上の、四つの地点は、一直線ではないものの、おおむね直線の帯の上に並んでいる。

おそらく、これは一連の祭祀と築造が同時期に始まった痕跡なのだろう。

「妙見」と同じく、ここにも神社

の原形が見て取れる。

縄文時代以来、数千年に渡って受け継がれた信仰の形、「イ・オマンテ」。

“環状列石と神体山”という様式は、この時点で、“神社と神体山”という様式に変化し、それは長らく現代にまで継承されている。

ところで、「国見町史」を読むと、これら一組の遺跡を発掘調査した人の名前が記してあった。

遺跡は、別府大学賀川光夫教授、大分県文化財専門委員入江英親氏、九州大学文学部考古学教室小田富士雄氏らによって、昭和三十二年と三十四年の二回に渡り、調査されたという。

やはり、八十年を越える巨石文化の研究史においては、“この人無しには進歩無し”と言うべき、忘れてはならない人がいる。

「神宿環状列石」を始めとする、大分県の巨石遺構についての考察。

「鬼籠列石」、「竹田津元宮遺跡」の価値の発見と発掘調査。

学問の為に奉げられた尊い命。現在ある巨石研究の成果は、先人

の功績の上に成り立っている。

巨石研究の分野に関わる人は、先人の功績だけでなく、真の学者の心まで理解する必要がある。

別府大学の賀川光夫教授の功績は、今後も長い年月に渡って、この分野に影響を与え続けるだろう。

巨石研究の分野には、かれこれ十数年も関わってきたけれども、この分野は疑わしい人物が多くて、研究活動は大変だった。

霊能詐欺師、オカルト雑誌の愛読者、人種差別思想家など、信用の無い人物の活動は、巨石研究の名譽を大いに傷つけた。

だが、この分野の人々を長く観察した結果、幾つか学んだことがある。その一つは、個々の人物の可能性についてである。

結果から言えば、挨拶をしない人は何も功績を残さない。個人の将来性は、そのような一面に明確に表れる。

個々の人が将来どんな功績を残していくのか。それを予測することは困難であ

るものの、その人の考え方を分析していけば、その人の将来までが予測可能だと思う。

他人の努力と才能を公平な観点で評価しない者は、大した功績など残さない。

挨拶をしない者は、決して先人の苦勞など認めない。

また、記憶力などが優れているために高学歴を得た人であっても、自分の心で感じて真実を追究しなければ、何の功績も残さない。

考古学の分野では、相変わらず、“西日本に環状列石無し”などという、悪い“常識”が支配している。

真実を追究しない人に、如何なる証拠を示しても効果は無い。

万が一、その目で、大分県の巨大な環状列石を見たとしても、その実在さえ認めないだろう。

今後もし長年に渡って、その“常識”は変化しないだろう。

この原稿は、九州に環状列石が実在することを前提に書いているので、悪い“常識”を持つ人にとっては、奇怪な文章としか感じられない。

ただ、真の学者は自ら見聞を積んでいくので、何が真実かを自ら悟る。優れた記憶力や高学歴など、大した価値を持たない。見聞を積む作業こそが、真実に至る道だ。

(続く)